

「草の根、から丹精する「緑」



佐藤さんは、ブルドーザーを駆使して大木を押し倒す（南富良野町内で）

周 囲の木の枝をたたき折りながら、激しい地響きと共に雪の上に倒れる大木――。

四方を針葉樹の山々に囲まれた北海道南富良野町。4月後半になっても多くの雪が残るこの地で、カラマツ林の間伐にいそしむ佐藤徳則（61歳・幾寅分教会ようぼく・札幌市）。

所属教会では、昭和53年の神殿普請を機に、信者から提供された林の間伐を開始。信仰熱心な祖父のもとで育った佐藤は、10年前からほぼ毎週末、仕事の合間を縫って車で3時間の道のりをひのきしんに駆けつける。

間伐は森の生育を助けるための大切な作業。細く弱い木が密集して日当たりが悪くなると、保水力のない荒廃した森へと変わってしまう。

高さ30mほどのカラマツの根元にチェーンソーで切り込みを入れ、ブルドーザーで押し倒し、小切りにして運び出す――。一連の作業を、佐藤をはじめ、ようぼくら6人ほどで黙々とこなす。

「足場の悪い斜面で、みんなで協力して木を倒したときの喜びはひとしお」。だが作業は、常に危険と隣り合わせ。一歩間違えば命に関わる。それぞれの持ち場・立場を念頭に、互いに声をかけ合って慎重に作業を進める。

当初から参加してきた80代の男性ようぼくがいる。すでに作業に加わることは体力的に叶わないが、毎回姿を見せてはいそいそと休憩場所のストーブを暖めたり、食事の用意を手伝ったりする。

その姿に、皆のひのきしんに対する思いが改まった。

「仲間のために最大限、自分のできることをする。一手一つとは、このことなんだな」

5年ほど前からは、佐藤の提案で、作業の時期を夏から冬に切り替えた。積雪がクッションとなるため木材の損傷が少なく、運搬も容易になるからだ。

「その年の間伐が終わると、くたくたになって『来年こそは休ませてもらおう……』」と思う。でも次の年になると、自然と山へ足が向く」

最近、新たな夢ができた。

数年後には仕事を辞め、空いた時間を間伐に充てる。いずれはケヤキやブナなど広葉樹の植林も――。

「年を取って体が動かなくなっても、自分にできることを続けていきたい」

季節や年によって、作業が辛いときもあれば、楽しい時期もある。

「人生と同じだな」

そう話すと、佐藤は照れくさそうに頭をかいた。